九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

南方徴用作家の〈タイ〉 : 太平洋戦争下の日タイ表象

Treeratsakulchai, Thanabhorn
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

https://doi.org/10.15017/25421

出版情報：九大日文. 19, pp.90-106, 2012-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

南方徴用作家の〈タイ〉

――太平洋戦争下の日タイ表象――

TREERATSAKULCHAI（トリラッサクルチャイ） Thanabhorn（タナボーン）

一　はじめに

アジア市場の拡大を目指し、タイに進出し、バンコク支店を設置した三井物産が、日本とタイ間の輸送をするため、名古屋・バンコク間定期航路を開設したのは、昭和三年一月のことである。それ以降、バンコクでは日本企業の会社が増加し、日タイ貿易が拡大していった。昭和初期の日タイ表象については、久保田裕子「近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜――昭和10年代の南洋へのまなざし――」（「立命館言語文化研究」二〇一〇年一月）で詳しく指摘されている。戦前のタイと日本の経済的な結びつきは戦中まで引き続き、両国の関係は強化されていった。

昭和一六年一二月八日以降、東南アジアに侵攻した日本軍は、次々と各地を占領して、軍政をしいていた。たとえば、第十四軍はフィリピン、第十五軍はビルマ、第十六軍はオランダ領東インド、第二十五軍はシンガポール・マレー・スマトラ、ボルネオ守備軍はボルネオにおいて、といった具合であった。独立国タイに対しては、開戦直後に日本軍の通過を認めさせ、一二月二一日に「日タイ同盟条約」を結び、翌年一月三日には「日泰協同作戦ニ関スル協定」を結んで、タイの独立と主権を尊重し、軍政はもちろんタイの国内での顕著な軍事行動を差し控えてきた。たとえば、一九四二年六月二九日に大本営が南方軍総司令官に対し、南方要域の安定確保と外郭地域に対する作戦準備を命じたとき、タイに関しては、「泰国駐屯兵カハ情勢ニ変化ナキ限リ最小限ニ止ムルモノトス」としている。（吉川利治「日タイ同盟下のタイ駐屯軍」(1)）

当時のタイは他の南洋諸国が植民地化される中、アジアで唯一の日本の同盟国となっていた。「日タイ同盟条約」を結んだタイは日本の東南アジアの他国への進軍に積極的に協力していった。東南アジアを中心とした各地でドイツのP・K（宣伝中隊）のように報道や宣伝活動などの義務を果たした。木村一信は南方徴用作家の役割について、宣伝班（軍報道班）の担った業務を三つにまとめて説明を加えている(2)。まず一つ目は、「対占領地宣伝」であり、日本語の普及、教育を中心としている。また、日本映画の上演活動などもここに入る。二つ目は、「対軍隊宣伝」であり、ここで言う軍隊とは日本軍を指し、戦意高揚と聖戦思想の普及などを目的としている。陣中新聞の発行を主な業務とした。三つ目は、「対敵宣伝」であり、主にラジオ放

送を通じての活動である。南方徴用作家たちはビルマ方面、マレー方面、ジャワ・ボルネオ方面、フィリピン方面に渡って活動したため、東南アジアに関する報告文や小説などが多く書かれている。しかしながら、タイは日本の同盟国であり、徴用先ではないため、当時のタイに関する記述は非常に少ない。

昭和十六年十一月に徴用令の「白紙」を受けた作家たちは、東南アジア方面に向かう輸送船に乗せられ、ビルマ方面やマレー方面に派遣された。サイゴンで、マレー方面の文学者は別の汽船に乗り、タイの南部ソンクラに上陸した。一方、ビルマ方面の文学者たちはサイゴンからバンコクまでトラックに乗ってきた。ビルマ方面に渡る作家たちはタイ領を経由してビルマへ行くので、日記や旅行記などの中にタイに関する記述がわずかながら存在する。そこで本論文では、同盟国のタイは当時の日本においてどのようなイメージで捉えられ、いかに見なされていたのか、という問題を解明するため、徴用作家が書いた戦時中の文学を検討し、分析していく。また、徴用作家が生成したタイのイメージをタイ文学におけるタイのイメージと比較して考察することが拙稿の目的である。

二　徴用作家が見たバンコク

ビルマ方面に向かった作家には、岩崎栄、小田嶽夫、北林秀馬、倉島竹二郎、榊山潤、清水幾太郎、高見順、豊田三郎、山本和夫などがいる[3]。ビルマに派遣される前に、彼らはタイにしばらく滞在していた。戦時中の作家たちは、タイをどのように見ていたのか、まずは榊山潤「南洋記（三）」[4]（「文藝日本」昭和十八年八月）を見てみよう。

> 少しバンコツクのことを記しておきたい。西貢は森の都であり、バンコツクは森と運河の都である。男女共にパヌンと稱する長さ七尺幅五尺の布を腰にまとふ。色は曜日によつて變へる習慣があつたが、今は多く青色を用ふ。女子の如きは殆ど洋風のパーマネント、わづかに乳を覆ふサバイと稱する洋風上衣を用ふ。地方都市の下層者はすべて裸足である。と、私はタイの事情を何か書物で讀んだ。勿論バンコツクが、一流の都市でないことは改めていふまでもない。けれどもバンコツクは美しく、また愉しかつた。

タイはもともと「シャム」を国名としていたが、昭和十四年六月二十四日に当時の首相ピブーンが国名をタイに変更した。榊山潤が述べた「パヌン」と「サバイ」の風景は明治大正期のシャム国情に関する文献、例えば岩本千綱『暹羅国探検実記』（明治二十六年十月）などの中でよく言及されている。しかし、実際にタイに来ると、「パヌン」と「サバイ」の風景の代わりに、「洋風のパーマネント」の女子の髪型などが現れた。これについて、高見順『ビルマ記』[5]（協力出版社、昭和十八年二月）でビルマ人は洋服を着ずにロンジを着ている一方、タイでは当時の政府による風俗改善がなされ、多くのタイ人は洋服を着てい

ると、タイとビルマの風景を比較して書かれている。また、平野零児『マンゴウの雨』[6]（天祐書房、昭和十九年五月）では、タイは「文明國も野蠻國もない」（一二〇頁）、「邏羅などと云つた頃は、只山田長政を思ひ出すだけで、時代と共に、ゑらく遠い遠い國かなんぞのやうに思はれ勝ちでしたがね。タイ國と名が變つてから、急に距離までが近くなつたやうに思ひます」（一一八頁）と書かれている。いずれも、それ以前にはありがちだった山田長政と関わる遠い国〈シャム〉のイメージより西洋化され、「美しく、また愉し」い国としての現代〈タイ〉が語られている。

「海天」へ赴く。大きなシナ料理店。三階で食事、四階がダンス・ホール。外は燈火管制で暗い。車で名物の裸踊りを見に行く。あやしげな家の前で車がとまる。

一人五十銭。あぶない階段をあがって三階へ行くと、小さな劇場風の広間に出る。人がいっぱいいる。ちょうど休憩で、しばらくするとはじめる。（中略）ジンタに似たへたなうるさい音楽にあわせて、裸かの女が幕の間から出てきて、ゆっくりとものうげに踊る。乳と陰部をかくしただけの衣裳。いきなりそう露出されてはかえって趣がとぼしい。しかし想像したほど醜悪ではない。皮膚も白く、均斉がなかなかとれている。ものすごい顔のもあるが、多くは茶目公のような顔をしていてなかなか可愛い。はじめは何かこっちの方が照れくさかったがだんだん見なれてくる。（高見順『高見順日記　第一巻』勁草書房、一九六五（昭和四十）年九月、二八七－二八八頁）

高見順は日記の最後で、「バンコックがおもしろ」いと書いている。高見順の日記によると、バンコクにはダンス・ホール、ニュー・バー、P屋、シナ料理店、Swee Hongレストラン、劇場、映画館などがある。特に、ダンス・ホールでの裸踊りは他の徴用作家の日記の中でもよく言及され、日本軍に人気のある場所である。このような歓楽街の描写を中心として、戦時中の他の国とは異なる、面白くて、「愉し」いバンコクのイメージが表現されている。

『此處じや、ゆつくり靜養するといふ譯にも行くまい。ラングーンへ戻つた方がいい』

飛行機があつたら、都合によつてはバンコツクへ行つて、二週間も靜養し、元氣をとり戻した方がよからうといふのである。有がたい好意である。

大村大尉も、それをすすめて呉れた。

『いいな、バンコツクは』

稲葉はバンコツクを思ひ出すやうに、

『氷もあるし、麥酒もある。地雷のない散歩區域もあるし――行つて來いよ』（榊山潤『ビルマの朝』今日の問題社、昭和十八年六月[7]）

榊山潤『ビルマの朝』では、ビルマでデング熱にかかった矢木が静養するためにバンコクに送られる。回復した矢木の「市民たちの喜ばしげなお祭り騒ぎ――そんな戦争氣分のバンコツク」という言葉は、戦争を「遠い惡夢のやうに拭ひ去」（二七二頁）る場所としてバンコクを捉えているように考えられる。一方、戦場になるビルマについては、倉島竹二郎「ビルマ戦線の思ひ出」[8]（「放送」昭和十八年三月）は「瘴癘不毛の地にあつて、物質不足その他のあらゆる惡條件のもとに、日夜をわかたぬ戦闘や警備をやつてゐられる兵隊さんたちの御苦労は、竝大抵ではない」と書いている。このように、日本人にとってタイの空間は、歓楽街のイメージを含めて「惡夢」のようなビルマの戦線とは対照的に、精神的な癒しをもたらす平和な空間として見なされる。そうした空間性やイメージが戦時下における〈タイ〉表象の著しい特色の一つであり、現在に至る〈タイ〉イメージの一つの源泉になっている。

三　タイ人への眼差し

岩崎栄『萬歳（チャイヨウ）』[9]は昭和十九年五月に泉書房より発行された。『萬歳』は「輸送船」「佛印」「バンコツク」（但し「バンコツク」は目次にはない）「宣傳戰」「紙の花」「動く」「チエツプ一家」「タイ軍從軍」「チエムマイ」という章に分かれ、マレーとビルマ方面に向かう南方徴用作家についての話である。この作品では、輸送船内の情況、南国の風景、宣伝班の仕事などの内容が、作者・岩崎栄の視線から語られる。ただし、タイ人女性チエツプと日本軍一等兵である藤井の話だけは、主に藤井の視点から語られている。チエツプと藤井との関係は、チエツプの弟を仲立ちとして始められる。藤井は日本語がわからないチエツプの家族と身振り手振りでコミュニケーションをとったり、チエツプの弟に物をあげたりして交流を深めていく。チエツプの家族も藤井を同じ家族の一員として認め、果物などをあげたりする。最後は藤井がビルマに派遣されることで、チエツプの家族と別れることとなる。このチエツプと藤井の物語は、戦時の日本人とタイ人の関係が理想化したかたちで反映されており、日本人のタイ人に対する眼差しが見いだされる。

チエツプの家は兵隊の宿舎の近く、「あまり大きくない」「バナナ畑の中の茅屋」（一八五頁）である。バナナ畑や椰子の木などがある果樹園は、豊饒な南国の一般的な風景で、果樹園を営むことは当時のタイ人の典型的な職業であった。チエツプには、父親、母親、弟、小さな妹がいるが、女性や子供や老人といった面が強調されており、その点で庇護を受けるべき弱者の空間と読み取ることもできる。そうしたチエツプの家の人々が、日本軍人の藤井を「『フジー、フジー』と呼びながら、片手で藤井を招」（一八六頁）く場面などは、日本軍を歓迎するタイの縮図という印象もある。

チエツプは「齒だけは白」い、「黒い妙齡」の娘である。チエツプだけではなく、「父親も赤ン坊を抱いた母親も、弟も、妹も、みんな黒い顔を揃へてゐる」（二一二頁）。日本人から見

たタイ人の身体は〈肌が白い〉日本人と違い、「黑い人種」で、「遠い異國」（一七六頁）を感じさせるものであり、これは土民性や未開性を強調するものと言える。藤井はいつもチェップの話を他の人に語る。その話は、チェップがスイカとザボンをまちがう話、当番をするときに徴用者と将校の区別ができない話、おかしな日本語を喋る話などである。チェップは日本語や英語ができず、作品中の彼女の発言は、藤井が教えてくれた、意味もわからない日本語のみとなっている。タイの空間の中にいるタイ人でありながら、チェップは語る主体としては登場せず、藤井の視点から一方的に語られる存在である。藤井によって語られるチェップは、スイカとザボンをくれたり、洗濯してくれたりするというように、藤井（あるいは、日本軍）への好意と服従が前景化された存在である。

〈黒い〉タイ人女性が好意を持つのは藤井である。藤井は「困つたやつ」で、「脱柵したり、上官と喧嘩したり、つまり劣等兵」であるとされている。また、彼とチェップの関係は、「住民を揶揄つちやいかん」という日本兵隊の規律に反して、日本の集団に「にやり、にやりしながら見」られている。つまり、藤井は日本軍の中では劣位に立つが、その彼でさえ、タイ女性のチェップやチェップの家族の中では、優位に立つ存在である。

「おうい、チヱツプ！　こんちくせう。」

チヱツプが、絹糸のやうな細かい聲で、「コンチクショウ」と應じる。

「わしや、下に行つて、晝寢をする。」藤井は、指を下に指し、肘枕で眠る眞似をしてみせ、

「晩には、スイカを呉れよゥ」と叡鳴りつけて、くるりと廻れ右をする。（一九一頁）

チェップと藤井の交際は「同盟國の好意に包まれるやうな感激」で、「日泰親善」だと言われる。しかし、藤井はチェップの弟に物を「投げて」やったり、チェップに「叡鳴」ったり、守衛の仕事を手伝わせたりする。しかし、いくら藤井に怒鳴られても、チェップは従順に藤井の言うとおりに従う。このように、藤井に支配されながらも、その藤井に好意的で従順なチェップの家族の描写は、日本人からみた戦時中のタイ人の表象ではないのか。

ところで、榊山潤「盤谷挿話」(10)（「新太陽」昭和十八年七月）という作品がある。ビルマへの派遣辞令を待っている主人公の坂井は、バンコクのタイランド・ホテルに泊まる。彼は、そこで働くパパイという洗濯女の娘と知り合う。パパイを可愛がっている坂井は、彼女を喜ばせるため、いつも物をやっている。しかし、最後にパパイは敵の爆撃で亡くなり、坂井はビルマに派遣される。

坂井は、何かいい氣持だつた。パパイの素直な喜びの鼓動が、少時は室内に殘つてゐるやうな感じだつた。自分には大して必要のない品物で、人が喜んで呉れるのを眺める

のは愉しい。

翌朝、坂井はまた、髭そりの後でつけるクリームを、パパイにやつた。これは毛唐が使用するものと見えて、如何にも濃く、二三度使つて坂井は持てあました。坂井はそれをパパイにやつて、パパイの喜びが、日本の蟇口の場合と、どつちが大きいかをためすやうな氣持だつた。

「盤谷挿話」とチェップの話を比べてみると、類似点がいくつかある。まず、パパイとチェップは日本軍人（藤井と坂井）に仕えるタイ人の女性であり、親日で従順なタイ人の象徴でもあり、そこには「日本を男性、タイを女性」とするアナロジーが用いられていると考えることができる。二つ目は、パパイは坂井から蟇口をもらってから、坂井と親しくなる。これに対して、藤井はチェップの弟に金平糖をやってから、チェップの家族のメンバーとして認められる。しかし、相手に物を与える行為は日本人の優しさや友好関係を表すだけではない。物をあげる行為は、あげる側（日本）をもらう側（タイ）に対し、精神的優位に立たせ、自分（日本）より弱い者（タイ）を守らなければならないという感情を引き起こすのである。日本人から物をもらうタイ人と、そのことによって日本を受容するタイとの関係性は、戦時の日本とタイの関係を象徴的に表現しているようである。

「タイの土をタイへ…」かうして聲を嗄した四十年來の宿怨の地パクセ、ルアンプラバンの大都及びカンボヂヤの一部が母なるタイに歸るのだ、いままで笑ひを封じてゐたタイ全民衆が面を北方に向けて●から“チヤイヨ”を口々にいつてゐる、恩讐に綴られた永い昨日も明けて“白象”がほんとの笑ひをとり戻したのだ」（「〝白象〟は微笑む　宿怨40年の地　メコン河の宝庫タイに還る日」（「読売新聞」昭和十六年三月十二日））（「●」は判読不能：タナポーン注）

昭和十五年にタイはフランスに旧領土返還を求めて、国境紛争を起こした。戦闘は日本の調停により終了し、タイはフランスから旧領土を返還された。日本の助力で旧領土を取り戻したタイの喜びは、藤井から金平糖をもらうチェップの弟の話や、坂井から蟇口をもらうパパイの話と重なっている。言い換えれば、もらう側のタイは、日本人に従順なチェップやパパイの描写に反映されており、それは戦時の日本人にとって日本人が期待するタイ人のイメージを通俗的かつ象徴的に表象している。

四　「チャイヨー」と叫ぶタイ人

岩崎栄『萬歳』と榊山潤「盤谷挿話」のもう一つの共通点は、タイ人が日本人に対して発する「チャイヨー」である。「チャイヨー」はタイ語であり、日本語の「万歳」と同じ意味を持ち、喜びや祝いを表すときに使う。『萬歳』というタイトルも、「部落を通過すると、土民達は仕事をやめ、両手を高く挙げ、「チヤイヨウ」「チヤイヨウ」（九五頁）と叫ぶことからつけられて

おり、それは日本軍に対する歓呼の表現である。「チヤイヨウ」と叫ぶタイ人の風景は、徴用作家たちの様々な作品で言及されている。それらの風景は日本人にとって、どのような意味があるのか、次の引用文を見てみよう。

> 五六人の子供が、これも向ふ側に行くつもりであらう。浦上の車と前の車の間に、どやどやと駈けて入つた。乗つてゐる浦上と岸が日本人だと分ると、十くらゐのその中の一人が、兩腕をあげた。
> 「チャイヨウ」
> 泰の萬歳である。他の子供たちもそれを眞似て、兩腕をあげた。
> 「チャイヨウ、バンザイ――」
> 車の内で、岸と浦上もそれに應じた。子供らは向ふ側に走り去つたが、どれも半裸體の子供の、笑つた黒い顔が目に殘つた。
> 「張切つてゐるな」
> その後ろ姿を見送つて、愉しさうに岸が云つた。
> （榊山潤『航空部隊』実業之日本社、昭和十九年九月）[11]

榊山潤『航空部隊』におけるタイ人の子供たちの「チャイヨウ」は日本軍人の「岸」を「張切」らせる。また、清水幾太郎は「座談會　大東亞青少年運動の構想」[12]（「座談會　大東亞青少年運動の構想」『時局雑誌』昭和十八年六月）で「僕などは、割合にセンチメンタルな性質を有つてゐるせゐか、異國へ來て、子供が、チャイヨー、チャイヨーと聲を嗄してど鳴つてくれると、涙が出るほど嬉しい」と述べている。タイ人の「チャイヨー」は、他の東南アジアとは異なる風景である。それに徴用作家が見ているのは、従順な同盟国としてのタイのイメージだけではない。タイ人の和やかな「チャイヨー」は日本人に温かい感情を与え、まるで同じ国民からの励ましを受けているような感覚を与えるのである。このように、「チャイヨー」は日本人にとっては異言語だが、日本とタイが一心同体であるような関係を結ぶ言葉だと読み取れる。

『萬歳』の最後に藤井はビルマに派遣され、チェップと別れることになる。一方、「盤谷挿話」のパパイも連合軍の空襲で亡くなり、坂井と死別する[13]。双方の作品には戦争で別れる話という共通点がある。特に「盤谷挿話」では、タイ人の娘の死に接した坂井は「唖然として眼を瞠」（一九六頁）っている。パパイの死（被害者としてのタイ）に対する坂井の同情には、日本人とタイ人の親密な関係性が見られ、戦時の他の作品でもよく書かれている。

> 通りの端には、臨時の食べ物を賣る露店まで出てゐた。泰の高射砲隊が、初めて墜した敵機。すでに幾度も、不法な爆彈を市中に落した憎むべき英國機。それを現物に行く市民の群れである。
> まるでお祭りのやうな騒ぎであつた。（中略）

車は、のろのろと進んだ。警官の制止も思ふやうにならず、狭い鋪道からあふれ出す人波に、速力が出せなかつた。晝食の時間が過ぎて、ひどく空腹を感じ出した浦上には、それがいくらか苛立たしい。
が、バンコツク市民の彈む鼓動を思へば、そんな苛立ちさへ申譯ない感じだ。（榊山潤『航空部隊』実業之日本社、昭和十九年九月）[14]

日本にとっての敵国である英国機を撃墜したタイの人々（バンコクの市民）の「お祭りのやうな騒ぎ」を見て、空腹からくる苛立ちに申し訳なさを感じる日本軍人の気持ちを通じて、日本とタイが同じ敵に向かい合う同盟国であることを印象づけようとしている。徴用作家たちが描くタイの風景は、明るく、日本に好意を持つ人々に満ち、他の戦場とは違った平和な場所という性格が強い。

日泰文化協定は百年、千年の懸案といふべきでせう、今後の運用について老婆心ながらただ一言付け加へるとすれば日本は…文化的にも兄のやうなつもりで泰を導かねばならぬといふことです、あくまで指導であつて支配のやうな誤解を持たせてはならぬ。（「兄の氣持ちで導かう　實結ぶ日泰文化協定」〈「読売新聞」昭和十七年十月二十九日〉）

こうした記事に見られる「兄の氣持ち」という比喩的表現は、戦時下において、大東亜共栄圏を正当化する言説として、新聞雑誌をはじめ多くのメディアでくりかえし使用されたものである。藤井とチェップ、あるいはパパイと坂井の例のように、日本人とタイ人を擬似的な兄妹として描く徴用作家たちの描写のパターンは、自身を「兄」として立体化する戦時下に反復された日本的言説の投影という一面があることは否めない。その上で、タイ表象に特色があるとすれば、それがしばしば「妹」として、すなわち女性性が前面化されるように描かれている点にあるだろう。

五　タイ文学における日本軍の表現

戦時中の日本文学におけるタイの表象は、親日的なイメージのみが一方的に描かれていた。しかし当時、侵略されたタイ人は日本軍に対する不穏な感情を持っていた。タイは対外的には日本の同盟国であり、連合軍に宣戦布告をしていたが、国内では日本の植民地のように支配され、圧力をかけられた。

日タイの関係は、開戦直後に締結された「日タイ同盟条約」に基づいて、日本軍のタイ国内通過や駐留が行なわれていたのだが、日本軍はややもすると占領軍のようにふるまって、独立国であるタイ人のプライドを傷つけることが多かった。たとえば市中のクロン（運河）で白昼、素っ裸で水浴したり、列車で着いた兵隊がホームからいっせいに立ち

小便したり、タイ人をなぐったり、僧侶に不敬を働くなどの行為である。なかでも激しくタイ民衆の反感を買ったのが「バンポン事件」[15]であった。これは泰緬鉄道の工事中にバンポンという町で、鉄道第九連隊の将校がタイ僧侶をなぐったことから、憤激した民衆が日本兵を襲撃し、数人を殺害した事件である。（市川健二郎『日本占領下タイの抗日運動：自由タイの指導者たち』勁草書房、一九八四（昭和五十九）年四月）

「バンポン事件」の後、タイと日本との関係を改善するため、昭和十八年一月に中村明人[16]がタイ駐屯軍司令官に就任し、終戦に到るまでタイ国内の活動を取り仕切った。中村明人は両国親善に貢献し、タイの信頼を得た。いずれにしても、日本と同盟国という立場のタイは、連合軍の空襲を受けていた。タイ人作家であるアージン・パンジャパンの戦時回想録『バム・バンコク』[17]では当時のタイへの空襲の状況について、次のように述べている。

日本軍に侵略されてから、僕は国のことを心配し、ずっと恨みを抱いていた。だが、今日は最高の幸せだ！それは、敵（連合軍：タナポーン注）の航空機のしっぽから煙が出ているのが見えたことだ。どこから攻撃されたのか知らないが、そのバンコク人がやつけた敵はここに落ちて、目の前で死につつある。（タナポーン訳）

連合国側により空爆されて、日本軍とともに空爆の被害を受けたタイは、日本軍に同調した。つまり、当時タイの日本に対する感情は、複雑で、愛情と憎しみが混ざり合ったものであった。これについて、中村明人は敗戦した日本軍へのタイ人の態度を次のように述べている。

かれら（タイ人：タナポーン注）の日本兵に対する同情は、日一日と高まっていった。弱いものを助け、貧しいものに恵んでやることは仏教の教えである。この教義をタイ人は戦後如実にわれわれに示してくれた。バナナ売りのお婆さんが、その日の糧にひさぐ商品を惜しげなく使役に疲れて帰る日本兵の雑嚢に押し入れてくれたり、交番の巡査が疲れた兵を列からつれ出して付近の店でコーヒーや牛乳を飲ましてくれたり、車夫が車賃はいらないから乗れとすすめてくれたりしたという例は、毎日のようにあった。

中村は、苦しんでいる日本軍人を助けるこのようなタイ人の態度は、「シンガポールと（略）まったく天地の差」でシンガポールでは日本軍に敵意を持ち、「まったく人道を無視」し、「復讐的」だとも述べている。

日本軍に対する同盟国タイの複雑な距離感は、トムヤンティの『メナムの残照』[18][19]の中でも描写されている。『メナムの残照』の原題は「運命の相手」を意味する『クーガム（ค่ากรรม）』で、

一九六七（昭和四十二）年に雑誌「シーサヤーム」で連載され、翌一九六八（昭和四十三）年に初版が刊行された。『クーガム』は戦後の作品だが、著者であるトムヤンティは戦時中のタイを描く上で、戦争に関する資料の他に、幼い頃の記憶と、知り合いの元連合軍人・フェルディナンド氏の証言を素材にして書いたとされている。また、主人公「コボリ」はタイ駐屯軍司令官の中村明人をモデルとしている[20]。トムヤンティは軍人である父から中村明人のことを聞かされていた。『メナムの残照』の物語は、実際の歴史に沿って設定されている。物語は開戦の直前に始まり、自由タイ運動のパラシュート事件（昭和十九年三月六日）について述べられ、最後にバンコク・ノーイ駅が空爆された事件（十一月二十九日）で終わる。『メナムの残照』はタイで五度テレビドラマ化[21]、三度映画化、一度ミュージカル化もされている[22]。『メナムの残照』の中の「小堀」と「アンスマリン」の悲劇的な愛の物語はほとんどのタイ人が共有しており、『メナムの残照』はタイ人の側から見る日本のイメージを表す代表的な作品といえる。この『メナムの残照』の粗筋を少し紹介したい。

海軍士官であった父親のルアンはアンスマリン（アン）が生まれた直後、イタリアに留学する。帰国後ルアンはアンの母親オーンと離婚し、アンは母親に引き取られる。貧しい生活の中、アンは母親と祖母の愛をうけ成長し、大学に進学する。アンの小さい時からの遊び友達に、村長の一人息子で、工学部に通う大学生ワナスがいた。彼は五年間のイギリス留学に発つ前に、アンに愛を告白し、彼女に自分の帰りを待ってくれるよう求める。昭和十六年十二月八日に日本軍はタイに進駐し、バンコクに駐留する。日本軍はアンの家の近くにあった小さな造船所を買い取り、沿岸や河川を航行する小型船を造るようになる。その造船所の所長のコボリはアンに好感を抱くが、タイに進駐している日本軍への反発が強いアンはコボリを冷たくはねつける。しかし二人の関係についての噂が村で広まったことを機に、コボリが日本軍司令官の甥であることや、アンの父親がタイの高級海軍将校であったことから、タイ日親善という政治目的もからみ、アンはコボリと結婚することになる。タイの地下工作活動で困っているアンの周りの人を助けるため、アンはコボリを愛していく。しかし、ワナスと約束しているアンはコボリに自分の気持ちを伝えることができない。最後に連合軍の空爆でコボリは重傷を負う。アンは瀕死のコボリを胸に抱かかえ、自分の思いを伝える。コボリはアンの胸の中で息絶える。

高橋勝幸は「日本軍のイメージが悪い中で、小堀は理想の日本人として人口に膾炙している。タイ人女性が日本人を見ると、「小堀」と声を掛けるほどである。それはテレビや映画の影響であろう。タイ人女性が日本人を見ると、「小堀」と声をかけるぐらいその名前は浸透している。僕は1987 - 8年にタイに交換留学したが、やはり「小堀」と学生寮の食堂のおばちゃんなどに声をしばしば掛けられた」[23]と述べている。タイ人にとって「小堀」は日本人の総称として使われるほど最も有名な日本人の名前である。「「永遠の恋」と日本像　ドラマクーカム（ママ）」ノ

パドル・モンコンパンさん」[24]によれば、「コボリ」はタイ人の心に入り込み、日本と日本人に対するイメージをもつくり出している」ということである。つまり、タイ人の心を広く捉える『メナムの残照』は、タイにおける日本、またはタイ人の日本人に対するイメージを生成していると言える。また、『メナムの残照』において生成された日本のイメージ（他者表象）の中には、タイの自己表象も潜んでいると思われる。

自分で認識している自分と、他の人から見た自分の姿には相違がある。本人が気づいていない側面を他の人は気づいていたり、逆に自分だけが知っていて、他の人に気づかれていない側面があったりもする。自分で思っている自分を「自画像」、他の人から見た自分を「他画像」という。親日のタイは徴用作家たちの視点で描かれたタイであり、日本人によるタイの「他画像」が見られるとしたら、『メナムの残照』はタイ人の視点で描かれたタイであり、タイの「自画像」が見られると言える。このタイの「自画像」がいかに描写されているのかを、次に考察する。

『メナムの残照』のアンスマリンの家は、コボリの造船所（日本人の空間）の近く、『萬歳』のチェップの家と同様に果樹園や菜園がある「タイ式の家」（上、二九四頁）である。このアンスマリンの家の空間は、機械だらけの日本の造船所と異なり、自然的でタイ式な空間だと考えられる。アンスマリンの家族は祖母と母親というように、女性ばかりであり、チェップの家族のように弱者（女性）の空間として捉えることができる。しかし、日本軍を大歓迎するチェップの家に対し、トムヤンティが描いた〈タイの空間〉であるアンスマリンの家は、日本軍に荒されるだけでなく、イギリス人の捕虜にも入られ、連合軍にも空爆される。これは、日本軍にも連合軍にも侵略されていた当時のタイの表象であると考えられる。

『メナムの残照』について、トムヤンティは「初めからこの本を日本人に読んでもらいたい希望を有していた」[25]と述べている。トムヤンティは意図的にアンスマリンをタイの自画像として生成し、理想的なタイ人女性として描写していると考えられる。これは、日本が見た南洋女性のステレオタイプから脱し、小柄、白い肌、大きな眼を持つ娘である。また彼女はタイ式の家に住み、タイの楽器「キム」をやるというように、典型的なタイ人でありながら、日本語も英語も話すことができるインテリ女性である。このように、タイ女性を代表するアンスマリンのイメージは、岩崎など徴用作家たちが描いたタイの女性像とは全く異なる。それは特に、彼女の反日態度に表れている。

「わたし、あんな奴と話したくない。大嫌い」
「どうしたの―アン、戦争と個人とは別よ。彼らにはあの人たちの任務があるのだし、わたしたちはわたしたちの仕事をすればよいの。ただ、友好的に話しかけられても何も迷惑にならないでしょう」
「大嫌いよ！」娘は強く言い放ち、さらに続けた。「いやな奴らに近寄ってもらいたくないの。とにかく、日本人が

嫌いだわ」（上、九〇‐九一頁）

アンスマリンは愛国者で、日本に嫌悪感を持つ。彼女は、女性として弱い立場に居ながらも、タイ人としてのプライドを持って、日本軍を「残酷」「野蛮」だと批判し、日本に服従しないタイ人のイメージを表している。敵国人のコボリと結婚させられても、彼女は「自分の民族を裏切りたく」（上、三六六頁）ないと、自分の愛国心を肯定した。しかし、結婚後のアンスマリンは「敵が損害を受ければ喜ぶべきことであったが、それが今では逆の感情が湧いて」（下、一九〇頁）、日本軍に同情を表す。日本軍人へ同情したり、イギリス軍人を助けたりするアンスマリンは、他人の痛みを自身の痛みと感じ、互いに助け合う仏教の教えの影響とされるタイの国民性を示したものだと思われる。つまり、タイは日本ほど〈強く〉なく、日本のように〈残酷〉でもない。〈平和〉〈調和〉を愛し、困っている者を助けるタイ。これがトムヤンティが伝えたい自画像である。

一方、コボリ海軍大尉を見てみると、コボリは「日本軍司令官の甥」であり、「背の高い」「青年将校」で、立派な造船所長である。コボリのイメージは、他の日本軍人と異なり、タイ人にとっての理想的な日本軍人として描かれている。

「全滅したのだろう。それで、所長はどうしたかね」
「まだ死んでいませんわ」
「それはよかった！」ポンは心から叫んだ。
「被害を受けたと聞いてやはり彼のことが気になったよ。どういうわけかわからないが、ニッポンはみんな虫が好かないが、奴だけは別だ。彼とは何回も問題を起こしたが、それは親しいからだよ。ほんとうに日本人であるのは残念だ。」（上、一九〇‐一九一頁）

コボリは、愛するタイ人女性・アンスマリンの存在から、タイ人をよく助けている。一方、ネット上での日本人の読者から感想によると、コボリは「軍人としては落第」（上、二八九頁）であり、気弱く、柔弱な日本軍人である。しかし、仏教の教えを内面化したタイ人は、コボリがタイ人を助けることを、「行儀がよい」（下、一三二頁）と認め、「マリ（コボリ：タナポーン注）のように女房を愛する旦那を見たことがない」（下、一八四頁）とほめている。コボリはやさしい日本人として描かれており、日本の固有名「コボリ」の代わりに、周囲の人々から「マリ」（ジャスミン）[26]と呼ばれる。『萬歳』などには見られない、コボリのような日本軍人は、タイ人にとっての理想的な日本人として生成されていると言える。

小堀が転勤を延期し、彼女と婚約したことは、新聞も大きく取り上げて発表していたので、村人たちの話題の中心となった。
「オーンの娘は幸福よ！」
アンスマリンにとってこのような噂を聞くのは心苦しいこ

とであった。今や瞬時にして、村人たちの侮蔑の陰口は消えて、彼女は幸福な人に変わってしまった。あの口うるさいミヤンばあさんも、ときどき顔を出してはお世辞を言っていくのであった。

「オーンさん、用事があればいつでも手伝いますよ。アンも幼いときから知っている隣同士だから。こんな幸福が舞い込むなんて夢のようだね。軍司令官から真珠やダイヤモンドやお金など、たくさん贈られたらしいね」（上、二九頁）

作中において、タイ人女性が日本軍人と結婚することは、「幸福」なことと見なされている。というのは、日本人のイメージは財産を与える側なのである。日本軍人と親しくしているアンスマリンの家は「チーズ、バター、ハム、コンデンスド・ミルク、牛乳」（上、一二七頁）など戦時中に手に入りにくい物をもらい、一般人より優遇されていると言える。このような描写は、徴用作家たちが書いたタイ人（もらう側）と日本人（与える側）の関係（チェップと藤井・パパイと坂井）と重なっており、もらう側のタイのイメージが反復して描写されている。しかし一方で、このことは村人たちに注目され、「嫉妬のあまり「非国民」とまで言われ」（上、三一八頁）、日本人と子供ができても「タイ人ではないのが玉に傷だ」（下、一七四頁）と言われる。

「国家間の友好関係」という政治的な理由のため、コボリと無理やり結婚させられたアンは、日本に領土を侵略され、同盟条約を結ばされたタイの状況と重なる。アンスマリンは日本人に反感を抱きつつ、困った時には、いつもコボリに助けてもらう。これも、戦時中のタイの状況が反映されていると考えられる。つまり、日本は「侵略者」と見なされながらも、フランスに奪われたタイの旧領土を取り戻しており、また、タイは日本軍から大きな被害を受けることがなかった。これに対して、タイ人は日本軍とともに連合軍による空襲の攻撃で被害を受けた。戦争を時間的・空間的に共有していたため、敗戦した日本軍に対して、タイは同情するしかなかった。このようなタイと日本との関係が、アンスマリンとコボリの愛と憎しみに溢れた、複雑な関係として表現されているのである。

六　まとめ

戦時下の日本文学におけるタイの表象の特色は、岩崎栄『萬歳』、榊山潤「盤谷挿話」、高見順「高見順日記」など、徴用作家たちの言説に典型的に表われるように、ビルマなどのような前線とは対照的な後衛地としての側面にある。もちろん、榊山潤「航空部隊」やタイの作家たちが描くように、日本の同盟国であるタイは連合国によって襲撃される戦場でもあり、そうした一面も点景として表現される。しかし、徴用作家たちのテクストで前景化するのは、レストラン、ダンス・ホール、ホテル、映画館、音楽、酒、女、そして、チャイヨーなどの〈癒し〉の空間であり、日タイ同盟を背景として、日本軍を歓迎し服従するタイの姿である。そうしたタイ表象の背景には、大東亜共栄

圏を支える日本とアジアとの関係性のモデルである。つまり、「兄」である日本とその庇護や指導を受けるべき弟妹であるアジア諸国・諸地域という大衆的な次元で共有されていた関係性のモデルである。そうしたモデルは、岩崎栄『萬歳』や榊山潤「盤谷挿話」など徴用作家のテクストには、「兄」のような日本の軍人とその「妹」のようなタイの女性という組み合わせを通して、典型的なかたちで描かれている。

「兄」を歓迎する「妹」としてのタイは、なぜ「妹」なのだろうか。たとえば、松岡英夫『ビルマの話』（児童図書館出版社、昭和十九年十一月）の第一章「ビルマといふ國」には、「ビルマは、いはば、日本の幼い弟のやうな國です。兄としては、弟のことは隅から隅まで知つてゐて、何かと面倒をみてやらなければなりません」という表現がある。日本は「何かと面倒を見てやらなければ」ならない「兄」として自身を主体化し、庇護や指導の名のもとに擬似的な兄弟・兄妹関係を強いる戦時下のモデルが看取されよう[27]。ここではビルマを「弟」として語っている。ビルマを「弟」とし、タイを「妹」が前景化して語るのは、戦時下における大東亜共栄圏についての同じ言説モデルの投影だとしても、両者のイメージの結び方には、何の違いもないのだろうか。「弟」と「妹」は、入れ替えてもかまわない性格のものであろうか。

タイについては、チェップやパパイが、「弟」ではなく、やはり「妹」のような娘であったことには理由があるように思われる。ひとつには、タイがビルマのような前線ではなく、後衛の〈癒し〉の空間として表現されていたことと関係していよう。『萬歳』や「盤谷挿話」の「妹」のような娘たちは、もちろん文字通りの妹ではなく、恋人の一面を兼ねたような存在でもある。その存在は、レストラン、ダンス・ホール、ホテル、映画館、音楽、酒などによる異国タイの中心に位置するのにふさわしい。ただし、チェップやパパイは文字通りの恋人でもなく、「妹」のような娘という性格を失わない。それは異国で戦う兵士にとって、故郷に残してきた庇護すべき存在、母や妹や娘などの女性たちの代理的な表象でもあるだろう。日タイ同盟を結び、「チャイヨー」と叫ぶタイが、女性性を前景化するかたちで表象される理由のひとつは、その点に求められる。チェップやパパイが、「妹」のようでもあり、恋人のようでもあるのは、庇護すべき存在としての女性なるものを代表しているからである。

興味深いのは、戦後のタイの作家が、戦時下において徴用作家たちが用いた日本軍人とタイ人女性のロマンスのパターンを使用している点である。日本の戦争犯罪が問われる戦後において、戦時下の日本の軍人と自国の女性を主人公として、その二人のロマンスを理想化されたかたちで描くというのは、タイ以外には例を求めにくいのではないだろうか。しかも、その作品『メナムの残照』は、小説としてのみならず、テレビドラマ、映画、ミュージカルなど種々のメディアを通して広く受容され、人気も根強いために、それぞれの分野で、くりかえしリメークされている。こうした受容のあり方も、アジアの他の国家や地

域では想像しにくい事態であろう。こうした受容のあり方が示唆するのは、『メナムの残照』における日本軍人とタイの女性という組み合わせが、特殊例外的なものというより、そういう組み合わせを受容する土壌の存在ということであろう。そうした土壌を形成する、ひとつの水脈として徴用作家たちが描いたタイ表象を再考してみる必要があるだろう。

ただし、それは単純な反復ではない。『メナムの残照』におけるタイの女性（アンスマリン）は愛国的で、それゆえ、反日感情を持っていたし、日本人の主人公（コボリ）も、例外的な日本人という一面が強調され、タイ人の期待にそうような変形された日本人となっている。このコボリに対するアンスマリンの葛藤には、戦時下に表明できなかった日タイ関係が再現されているようにも見える。また、『メナムの残照』は、一九九〇年代になってもテレビドラマ化され、タイの国民的スターであるトンチャイ・マックインタイが「コボリ」を演じたこともあって、大ブームを巻き起こした。たとえば、そういう現象を戦時下の記憶だけで解釈するのは、明らかに一面的でしかない。テレビドラマ化も映画化も一九七〇年代以降[28]のことである。その当時の日本は、敗戦国から、いわゆる高度経済成長を遂げ、アメリカ合衆国を追う経済大国になっていた。自立的で反日的なアンスマリンが、タイ人にやさしい日本人コボリとの間に繰り広げられる葛藤に満ちた愛憎劇は、戦後復興と高度経済成長を遂げ、戦前と同じように、経済や文化を通じて、再びタイに上陸してきた経済大国日本への愛憎や葛藤を二重写しにするものとして受容されているのではないか。つまり、『メナムの残照』というテクストは、戦時下の徴用作家たちが描写したタイと経済的成長を遂げた日本に対するタイの側からのまなざしが合流する場所になっている。

日本の現代小説におけるタイの記述が、しばしば「女」や「癒し」を焦点化することも、右の経緯と関係するが、その具体的な分析は今後検討していきたい。

【注記】

1 『東南アジア史のなかの日本占領』（早稲田大学出版部、一九九七年五月）

2 木村一信「「南方徴用作家」――〈ジャワ〉を中心に」『昭和作家に〈南洋行〉』（世界思想社、二〇〇四年四月）

3 注2に同じ。

4 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第7巻：榊山潤（3）』（龍溪書舎、二〇一〇年二月）所収本文（一三五頁）。

5 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第1巻：高見順（1）』（龍溪書舎、二〇一〇年二月）所収本文（二三一頁）。

6 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第14巻：平野零児 座談会・対談』（龍溪書舎、二〇一〇年二月）

7 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第5巻：榊山潤（1）』（龍溪書舎、二〇一〇年二月）所収本文（二一九―二二〇頁）。

8 『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第11巻：倉島竹二郎』（龍溪書舎、二〇一〇年二月）所収本文（二頁）。

9　土屋忍「解説　岩崎栄著『萬歳』――記録性とユーモア」（『萬歳　文化人の見た現代アジア16』ゆまに書房、二〇〇二年九月）は「他作家と比べてかなり細かな情報が織り込まれているのが特徴で」、「自らの感性や記憶を信じて書くタイプの文学者が多い中では貴重な存在」があると述べている。『萬歳』の引用は『萬歳　文化人の見た現代アジア16』（ゆまに書房、二〇〇二年九月）による。

10　注4に同じ（一八四頁）。

11　『南方徴用作家叢書・[ビルマ編]第6巻:榊山潤（2）』（龍溪書舎、二〇一〇年二月）所収本文（三四頁）。

12　注6に同じ（六五頁）。

13　ホテルの洗濯女の娘のパパイの話は『ビルマの朝』（今日の問題社、昭和十八年六月）でも登場する。しかし、『ビルマの朝』でのパパイは亡くなった友達の写真を矢木に見せるという話である。

14　注11に同じ（三五頁）。

15　「バンポン事件」は昭和十七年十一月二十四日に勃発した事件である。その原因は、タイ僧侶が捕虜にタバコを恵んだためである。

16　帰国後、中村明人は太平洋戦争期のタイの状況についての『ほとけの司令官　駐タイ回想録』（日本週報社、一九五八年六月）を執筆した。以下中村の発言は同書による。

17　อาจินต์ ปัญจพรรค์, "บอมบ์กรุงเทพฯ" สำนักพิมพ์มติชน, กรุงเทพมหานคร, 2541.（一九九八年十一月）

18　トムヤンティの本名はウィモン・シリパイブーンである。一九三七年、バンコクに生まれる。タマサート大学商学部を卒業する。十四歳より文筆になじみ、二十歳で長編を発表する。トムヤンティは作家として活躍するだけではなく、タイ女流作家協会会長、タイ王国上院議員を歴任した。

19　西野順次郎訳『メナムの残照（上・下）』（角川文庫、一九七八年十二月）のち『メナムの残照　上・下』（大同生命国際文化基金、一九八七年十二月）。引用は後者による。

20　Sanphasiri Viriyasiri, THE ALLIES BOMB BANGKOK NOI, ARTS & CULTURE, VOL11 NO 8, JUNE 1990.

21　一九七〇年、一九七二年、一九七八年、一九九〇年、二〇〇四年にテレビドラマ化された。

22　映画化されたのは一九七三年、一九八八年、一九九五年で、ミュージカル化されたのは二〇〇四年である。また、ミュージカル「クーガム」は二〇〇七年に再上演された。

23　「タイにおける第二次大戦の記憶――自由タイ、『メナムの残照』、『王朝四代記』を中心に」（「地球宇宙平和研究所所報」二〇〇七年十二月）

24　「西日本新聞」二〇〇四年四月二十三日

25　「訳者のあとがき」『メナムの残照　下』（大同生命国際文化基金、一九八七年十二月）

26　タイ人にとって、ジャスミンとは、日本の桜と同様の存在で、また仏様にお供えする花輪を編む時の材料の一つとしても使われる。

27　松本常彦「「ビルマの竪琴」以前」（松本常彦・大島明秀編『九州という思想』花書院、二〇〇七年三月）

28　一九六四年にタイ大丸がバンコクに開店し、トヨタ自動車も工場の運転を開始する。タイは日本に経済的に侵略されたのである。一九七〇年九月に、バンコクで日系企業のシンボル・タニヤビルが完成されてから、

タイに進出する日系企業は年々確実に増えていった。日本人駐在員が接待に利用するため、ナイトクラブや日本料理店は歓楽街として形成された。日下陽子『タニヤの社会学――接待から売春まで……バンコク駐在員たちの聖域――』（めこん、二〇〇〇年九月）によると、その時からタニヤは「タイ人女性と簡単に、しかも安く疑似恋愛が体験できる」場所を提供する、日本人のための「コンビニ的娯楽施設街」に姿を変えつつある。

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年）